



月刊食糧ジャーナル 2016年10月
 実りの秋の会津。今年も稲刈り体験交流
 強まる“絆”広がる会津米ファンの輪

企画特集 ふくしまの米 JA会津よつば



21回目となった新米稲刈りイベント交流。子供たち（18名）の元気な声が田んぼに響いた（9月25日、会津美里町）。この写真は、店舗のコメ売場に掲示される。

福島産米は、全量全袋検査（玄米）を実施し安全性の確保に取り組んでいます。

21目を迎え絆を強めつつ会津米ファンの輪が広がっている。「安全・安心（全量全袋検査）で担保」でおいしさを追求した私たちの極上の会津米づくりを肌で感じてほしい」（長谷川正市代表理事専務）と、産地側も一行を歓迎する。

一方、「牛タン・とろろ・まめし」の傑わざしフードサービス（根岸榮治社長）。首都圏中心にドミナント戦略で37店舗を集中出店する同社は、おかわり自由のごはんに会津産コシヒカリを使い、延べ54.5万人が訪れる。10月5日、喜多方市塩川町にある黄金色の会津エコマコシヒカリほ場にやってきました。自社の商品に理解を深めようと産地研修を実施しており、5月20日の田植え体験に続いて、今度は稲刈りにチャレンジした。駆けつけた喜多方市の山口信也市長、同JAの長谷川正市代表理事専務とも親睦を深めつつ、「今後とも安全・安心の会津米にこだわっていく」ことを確認し合った。



旧JA会津いで時代から続く交流は今年で3年目。会津喜多方米との絆も年々強まってきた（10月5日、喜多方市塩川町の斉藤勇さんのほ場にて）

福島米

極上の会津米

JA会津よつば **M** くらセライス

実りの秋の会津。今年も稲刈り体験交流 強まる“絆”広がる会津米ファンの輪

イメージキャラクター
コメナルド画伯



ねぎしフードサービスとの交流には喜多方市の山口信也市長、JAの長谷川正市専務も駆けつけた（10月5日、JA会津よつば塩川支店）



富士シテイ専用の特別栽培米コシヒカリほ場（会津美里町） 9月25日

130万俵の集荷販売ボリュームを持つJA会津よつば。2年後の米政策改革を視野に入れ、多様な販売チャンネル構築に乗り出した。より「特A」産地をアピールするために、主食用米に力を入れ、酒造好適米の契約栽培や多収稲米・新品種等の戦略的な作付け拡大もテーマに据える。需給動向を見据え全量完売するためには「会津米が生産者サイドに見える形の流通」を目指し、田植え・稲刈り等の体験を通じた卸・実需者との交流に取り組む。会津米ブランドづくりに連携は欠かせない。

9月25日、収穫の秋を迎えた同JA管内の会津美里町に、首都圏の親子18組36名が稲刈り体験交流にやってきました。会津コシヒカリをこだわりの米として取り扱う神奈川県の食品スーパーチェーンの富士シテイオレグループと取引卸の傑わざしせが企画したもので、平成8年から「食農教育」ともいふべきこの交流が始まり、